

特集

理工系向け日本語教材改革の構想と実践

一 『現代実用日本語』シリーズ教材の作成例を中心に一

張 威*

本稿は現在の中国社会における経済発展の客観的ニーズを調査し分析した上で、IT 概念を取り入れて作成した『現代実用日本語』という日本語シリーズ教材（高等教育出版社）の教学理念、編集方針および教材内容の特徴などを紹介することによって、新しい歴史的時期において理工系向け日本語教育と理工系学生のための日本語教材開発を重視し強化する重要性と必要性を指摘した。

キーワード：理工系向け日本語教材、社会的ニーズ、ソフトウェア産業、IT 概念、教材の特徴

1. はじめに

『現代実用日本語』（中国高等教育出版社）は、中国で初めて開発された理工系大学生のための基礎日本語教材であり、〈基礎編 1〉、〈基礎編 2〉、〈基礎編教師用指導参考書〉と〈中級編 1〉、〈中級編 2〉、〈中級編教師用指導参考書〉の計 6 冊から構成されている。2007 年 8 月には、〈中級編 1〉までの 4 冊が既に世に送られている。そして、後の 2 冊は 2008 年 3 月に刊行する予定である。この教材シリーズは「外国語教育は実際の社会的ニーズに適応し、奉仕すべきである」という理念に基づいて作成されたものである。中国の日本語教材改革の試みとして、出版されて以来、日本語教育関係者から広く注目され、好評を得ている。

拙稿は、この『現代実用日本語』のシリーズ教材作成の実践例を踏まえて、中国における非専攻日本語教育の問題点を指摘した上で、理工系大学生のための日本語教育を重視し、その客観的ニーズに適応する特徴のある教材開発を進めることの必要性を主張しようとするものである。

2. 背景

今世紀に入って以来、グローバル化社会の急速な発展に伴い、如何にして新しい時代の社会的ニーズに適

応する優れた総合的能力と素質を備えた人材が養成できるかは、もはや今日の学校教育で直面せざるを得ない重要課題であろう。当然なことに、日本語教育の分野でも現代社会の実際的ニーズに合わせて教育方針を調整し、学習内容を見直すことが容赦なく要請されているということは確かである。

2.1 問題の所在

このような情勢の下で中国日本語教育の現状を見れば、専攻日本語教育に比べて非専攻日本語教育のほうがち遅れており、非専攻日本語教育の中でも特に重視が不足しているのは、理工系大学生のための日本語教育であることが明らかになっている。

我々は『現代実用日本語』のシリーズ教材を開発するために、約 6 ヶ月にわたって中国国内の一部の大学と企業で大規模な社会調査を実施した。この調査の結果によれば、中国では、戦後数十年来非専攻日本語教育の分野において、理工系の学生であろうと文系の学生であろうと、長期にわたってほぼ同様な教科書が使用されてきた。つまり、理工系の学生に対しても日本の社会文化の紹介や日常のコミュニケーションの内容を中心とする教科書が使用されてきたので、理工系学生の特徴と特殊のニーズについては、ほとんど無視されてきたと言っても過言ではない。

如何にして外国語を科学技術と結び付けて教えるべきかは、今日まで中国の日本語教育関係者が頭を悩ます大きな問題である。以前から、中国では『科技日本

* (中国) 清華大学外国語学部教授, 清華大学日本語文化研究所所長

語読本』という名称の日本語教材^{註1}があり、日本語教育と科学技術の知識伝授を平行させた教材として知られていた。しかし、このタイプの教材は基本的には、日本語専攻の3、4年生の段階で使用されるものである。その狙いは主として学生の読解力を高めると同時に、科学技術の内容に触れさせることによって学習者の知識を広げようとするのであった。ところが、実際には、このような外国語学習と科学技術との結び付け方は、おおよそ形式のみに留まっているにすぎず、根本的な問題解決にはなっていないようである。第一に、日本語専攻の学生は高学年になると、かなりの読解力が身につけている。『科技日本語読本』のような教材は表現の上では、特に難しく感じられるものではなく、むしろその内容と文体的特徴を比較的容易に理解することができ、学習者はそれほど苦勞せずにとらすらすら読めるようになる。ところが、たとえこのような専門性の低い科学技術の文章を多少学習したからといって、知識の幅は若干拡大することができるにしても、科学技術の専門知識がそれで習得できるというわけでは決してない。第二は、非専攻の日本語学習者の場合は学習時間が少ないこともあって、とても『科技日本語読本』が読めるような実力を持っていない。一般的には、難しすぎるという傾向が伺える。だが、このような様々な欠点が指摘できるからといって、『科技日本語読本』のような教材は依然としてその存在価値と歴史的な役割が否定できない。何と言っても、それは外国語教育を科学技術と何らかの方法で結び付けようとする長年の努力のたまものであり、先人の知恵の結晶であるにほかならない。

しかし、21世紀は新しい時代なのである。この時代には、この時代の特徴に相応しい問題解決の新たな方法が必ずあるはずである。「外国語教育と科学技術を合理的に融合した」日本語教育の道は、非専攻日本語教育関係者の努力と試行錯誤の中で見出せるに違いない。このような背景の中で、われわれは、中国高等教育出版社から依頼を受けて、中国の理工系大学生向けの基礎日本語教材を開発するというプロジェクト（代表者：張威）を立ち上げたのであった。われわれは理工系大学生向けの基礎日本語教材を開発する必要性と現

実性を確実に認識し市場のニーズを把握するために、まず半年間にわたって国内の大学と企業を歩き回り、インターネットも利用して社会調査を施した。そして、その調査結果に基づいて、中国の理工系大学生向けの日本語教材を作成するための理念と基本方針を確立し、本シリーズ教材の特徴と各課の内容を取り決めたくえで、教材作成の計画を練り上げたのであった。

2. 2 本教材の理念と編集方針の確立

非専攻日本語教育には、文系と理工系という二つの相対立する学習者の主体がある。この二種類の学習者にはそれぞれ異なる基本的ニーズがあり、学習目的も一様ではあり得ない。これまで、中国では、長期にわたって理工系学生の日本語教育に対する特殊な需要と切迫した期待が基本的に無視されていた。このようなことは決して日本語教育の妥当なあり方ではない。理工系学生には必ずそれなりの特徴があり、彼らは日本語教育において平等に重視される権利がある。それと平行して、われわれとしては、理工系学生のためにその自らのニーズに応えられるような日本語教育を実施する義務もある。

そもそも、教育は社会の産物であり、そして社会に奉仕し役立つものでなければならない。したがって、われわれは、①社会の実際的なニーズと②理工系学生に共通して求められるような要素を考える必要がある。社会調査によって、次のような状況が明らかになった。20世紀90年代になって以後、中国ではコンピュータソフトウェア加工貿易の規模が徐々に拡大し、今はもはや一つの新しい産業として確立されるようになってきた。大連や上海などの沿海都市では既に大型のソフトウェア開発産業基地が完成し、関連企業は大小合わせて数千社を数え、従業員は10万人以上に達しているという。90年代半ば頃から、清華大学、北京大学をはじめ、中国国内では多数の大学で相次いで「コンピュータソフトウェア学院」^{註2}が設立された。2006年10月現在では、その数はすでに60校に上り、企業と地方政府によって設立されたものを含めれば、すでに100校を上回っている。これらの「コンピュータソフトウェア学院」はいずれもソフトウェア開発の専門的人材を養成する教育機関である。消息筋によれば、中国の

ソフトウェア開発産業の約 8 割の仕事が日本から依頼されており、将来的には、対日本ソフトウェア加工貿易産業を経済発展の一つの新たな柱にするという戦略的な構想が、中国政府によって既に定められているという。一方、日本側も中国を日本のソフト加工貿易の最も理想的なパートナーとして受け止め、積極的にこの分野の取引規模を拡大しようとしている。インターネットによれば、2006 年 10 月現在の日中ソフトウェア加工貿易額は約 30 億ドルくらいであり、日本政府の方針では、2010 年にはこの規模を 100 億ドル以上に拡大する見込みだという。この状況からすれば、数年後、日中間のソフトウェア加工貿易は必ず急成長の時代が訪れてくるに違いない。一方、ソフトウェア開発会社の給料が他の企業と比べて特別に高い（初年給は約 2 倍）ということもあって、現在、ソフトウェア開発企業での就職は既に理工系大学生が憧れる人気職種中のトップになっている。

ところが、このように急速に発展の一途を辿っているソフトウェア産業は、実はきわめて深刻な問題を抱えているのである。つまり、この分野では日本語のできる人材はあまりにも不足すぎているということである。現に対日本ソフトウェア加工貿易の企業では、日本企業や合弁企業が圧倒的に多く、これらの企業では、従業員はある程度日本語ができることが望ましいという日本企業からの要望があり、かつ実際に日本語能力は必要である。しかし現実には、国内の大学で養成された IT 人材はほとんど日本語が分からない。一方、大学外国語学部を卒業した日本語専門の人材は IT の知識と専門的な技能を持っていない。この矛盾を効率よく解決する方法としては、IT の人材に日本語を習得させるほうが妥当であろう。その理由は IT の専門知識を習得するのに様々な条件が必要であり、習得が比較的難しいためである。

ソフトウェア企業で調査を行った時、社員の日本語研修に適切な教材がないために困っているという苦情が多数寄せられた。一日も早く、この深刻な需要にうまく適応できるような日本語教材を開発してほしいという現場からの期待が特に大きかった。

周知のように、理工系学生といっても、その具体的

な専門となると実に様々あり、それらの個別的なニーズを一々考慮に入れて教材を作ることは、とうてい無理であることは言うまでもない。とすれば、何とかして理工系学生に共通して必要な専門的な特徴はないかを考えてみる必要が生じる。そして今の時代を生きている理工系学生の共通点として IT という概念以外は考えられないだろう。理工系の如何なる学科もしくは分野でも、IT の基本的知識を抜きにしては論じられない。特に、コンピュータの知識は必要不可欠である。こうして、IT の基本的概念要素（特にコンピュータソフトウェア関連の知識）を導入することは、われわれの新しく作成する日本語教材の一つの大きな特徴として確立されるに至った。

3. 本教材の特徴

『現代実用日本語』という教材は、「現代」と「実用」という二つのキーワードによって特徴付けられているように、21 世紀の時代感と直接社会に役立つ実用性がきわめて重視されている。そして同時に、「理工系向けの基礎日本語教材」という本質的な性格と本教材はこのような性格の日本語教材として、中国における初めての試みであるという認識と使命感が教材作成の全過程を貫いている。

『現代実用日本語』を作成するに際して、以下の特徴が挙げられる。

- (1) 編集前に社会調査を実施し、それに基づき、編集方針と教材内容を決める。
- (2) IT 概念を教材内容の基調にする。
- (3) 編集グループの構成
 - A. 理工系の特色を際立てるために、意図的に理工系大学の日本語教員を教材編集グループに組み入れた。
 - B. 執筆者は清華大学、北京大学、北京外国語大学、北京第二外国語学院、北京工業大学、北京科技大学の日本語教員および企業代表と日本人スタッフによって担当される。
 - C. 執筆者は全員日本留学経験者（数年ないし十数年）であり、本文は、必ずネイティブの日本人スタッフが執筆することとした。

(4) 作成基準と目標

- A. 中国教育部制定の「大学日本語作成要領」の基準に従う。
- B. 日本語能力試験に連結する〈基礎編 1-2〉を修了すれば 4 級、〈中級編 1-2〉を修了した後、3 級に相当する日本語能力が身に付く。

(5) 各冊の内容分担

- A. 〈基礎編 1-2〉は、大学のキャンパス文化を反映し、学生の身近な生活断片と日本の若者に関する最新的话题を取り入れる。就職活動と面接を受ける場面を設定する。
- B. 〈中級編 2〉は、会社のオフィス文化を中心に展開する。設定した将来の職場の様々な場面から会社の中の礼儀作法も学べる。
- C. 〈基礎編 1-2〉も〈中級編 1-2〉も IT の概念と結びつける。

(6) 本文は、「会話」と「短文」から構成される。異なる文体を同時に学習する。

(7) 各課の単語表は、中国語訳語のほかに、声調記号と英語の訳語も付加する。

(8) 教材に出現する漢字は、理工系学習者に便宜を与えるように、場所はどこにせよ、すべての箇所に一律に振り仮名をつける。

(9) 文法の説明は、簡単明瞭にする。できるだけ例文の提示により具体的な用法を示す。

(10) 各課で日常語彙を 8 語、IT 専門用語を 10 語、IT 関係のセンテンスを 1 文ずつ提示し、放課後に自習させる。

(11) 各課に本文の内容に関連して実用的かつ多彩で豊富な豆知識が中国語で 1 コラムずつ付けてあり、それを読んで知識を広げることができる。

(12) 各課の内容に応じて、挿絵がある。また、本文の文字サイズを大きくすることによって、視覚的に学習者の負担を軽減する。

(13) 練習問題の方法と内容を重視し、練習で学習内容の習得状況をチェックできる。

(14) 各冊に中国国際放送局の日本人アナウンサーによる朗読収録の MP3 ディスクが付いている。

(15) 〈教師用参考書〉には、各課の中国語参考訳文と

練習問題参考解答のほかに、教員の負担を軽減するために、各課の教案を提示し、〈練習素材市場〉を設けている。教員は適宜、自由にそれを利用することができる。

(16) 各冊に中間試験と学期末試験の試験問題をそれぞれ「試験問題 A」と「試験問題 B」の 2 部ずつ提示した。そのほか、〈基礎編 1-2〉を修了した後に本語能力試験 (4 級)、〈中級編 1-2〉を修了した後に日本語能力試験 (3 級) の模擬テスト用の試験問題が 2 部ずつ付けてある。すべての試験問題は、教員がそのまま使用することもできるが、少し手を加えて使用することもできる。解答は各冊の〈教師用参考書〉に入れた。

4. 各冊の本文のタイトル

『現代実用日本語』の正教材は、基礎編 2 冊と中級編 2 冊から構成されている。2 学年 4 学期の授業で週に 4 時間ずつ教えることで、約 260 時間という配分のシラバスが作成されている。そして基礎編と中級編を修了した時点でそれぞれ 20 時間ずつ特訓を受ければ、合計 300 時間で日本国際交流基金実施の日本語能力試験 (3、4 級) に合格することができる、というように構想されている。『現代実用日本語』というシリーズ教材各冊の各課のタイトルを巻末の付録で提示する。これらのタイトルからも、本シリーズ教材の本文の内容をおおよそ把握することができよう。

5. 終わりに

中国では、理工系学生の特徴と実際のニーズを配慮し、理工系学生のための日本語教材として、〈現代実用日本語〉というシリーズ教材の開発が日本語教材改革の第一歩を踏み出した。これは、中国国内で予想される日本語教育の空前の発展に伴う企画であり、中国の日本語教育に対する現代社会の切実な需要でもある。

本稿で指摘したように、中日間のソフトウェア加工貿易の規模拡大に伴い、如何にしてソフトウェア開発人材養成のための日本語教育を強化するかは、今後 10 年—20 年にわたって中国の日本語教育が直面しなければならない重大な課題であろう。われわれ日本語

教育関係者は、急激に浮上してきたこの社会的ニーズの変動に注目を集めなければならない。

2008年3月に(現代実用日本語)を全て刊行した後、われわれはソフトウェア開発企業の社員研修のための日本語教育専用教材(2冊構成)を開発する予定である。このように、日本語教育を直接社会の経済発展に連結させ、貢献しようとする動きは必ず益々盛んになり、今後の中国における日本語教育の新しい展開となるであろう。

注

注1 例えば『現代科技日語』(北京語言文化大学出版社)、『科技日語閱讀指導』(中国對外翻譯出版社)など。

注2 中国では、総合大学に設立される「学院」は「学部」とほぼ同様な概念ではあるが、学部より規模が大きい。

付録『現代実用日本語』シリーズ教材の各課タイトル

表1 <基礎編1>

1-3	発音1、発音2、発音3
4	【会話】わたしはコナンです 【短文】自己紹介
5	【会話】あそこにプリンタがあります 【短文】わたしの家族
6	【会話】学生食堂の料理は安いです 【短文】私の大学
7	【会話】何時に授業が始まりますか 【短文】わたしの一週間
8	【会話】部屋でゲームばかりしています 【短文】恵子さんのアルバイト
9	【会話】世界の情報を集めることができます 【短文】情報化社会
10	【会話】カラオケに行きませんか 【短文】Eメール
11	【会話】明日までに出してください 【短文】犯人は誰?
12	【会話】王府井のデパートへ行きたいのです 【短文】手紙
13	【会話】ゲーテの詩集をもらいました 【短文】日本の「お返し」文化
14	【会話】明日一緒に行ってあげるよ 【短文】インターネット
15	【会話】ゴミと一緒に捨ててはいけない 【短文】循環型社会

表2 〈基礎編2〉

【会話】・【短文】	
1	初めてのチャット
2	携帯電話のない生活に耐えられますか
3	電話応対は難しい
4	やっと買ったMP3
5	Eメールで大失敗
6	MANGA&コスプレ
7	みんなやってるブログ
8	僕もプレゼンテーション
9	電車男
10	若者言葉
11	デジタルカメラ
12	就職活動
13	履歴書でアピール
14	初めての面接
15	卒業式

表3 〈中級編1〉

【会話】・【短文】	
1	初めての入社
2	オリエンテーション
3	新入社員歓迎会
4	健康診断
5	お客様への対応
6	ソフトウェア制作を受注する
7	業務報告
8	商談に参加する
9	納品と立会い検査
10	新技術展覧会の会場で
11	「合コン」に参加する
12	出張後のフォロー
13	OHP・PPTを使いこなす
14	業績評価
15	忘年会

表4 〈中級編2〉

【会話】・【短文】	
1	システムエンジニアの資格を取る
2	パソコンにソフトをインストールする
3	ネット検索とダウンロード
4	ネットで商品を購入する
5	ウイルスがやってきた!
6	社内ランのトラブルを解決する
7	携帯イヤホンを使う人たち
8	電子アルバムを作ろう
9	マルチメディア教育の未来
10	日本での研修
【読解文章】	
11	コンピュータの起源
12	IT産業の急速な発展
13	ソフトウェア加工貿易の現状と未来
14	デジタル化社会の恵み
15	テレビゲームの功罪